

小学校国語科における関係付けて考える力の育成

— 書く活動を通して —

嶋 本 信 之¹

グローバル化、多様化、複雑化が進む現代社会において、考える力を育成することが重要になっている。本研究では、国語科における「関係付けて考える力」を明確にして、授業づくりに取り組んだ。その結果、「情報を活用して考える」「他者と交流して考える」「自己と対話して考える」3つの「関係付け」を踏まえ、考えを整理し明確にしてから文章を書くことで、主体的・客観的・論理的な文章が書けることが明らかになった。

はじめに

社会は日々、複雑になり変化している。子どもを取り巻く環境もコンピュータや携帯電話の普及などで広がっている。その反面、子どもたち同士のつながりや親子関係、地域との関わりなど一つひとつのつながりやつながりは希薄になっているので、子どもたちは自分と社会との関係が見えにくくなっている。これからの時代を担う子どもたちには、幅広い知識と柔軟な思考力に基づいて判断することや他者と切磋琢磨しつつ人々との共存を図ることなど、変化に対応する能力や資質が一層求められている。

知識基盤社会に必要な能力「生きる力」は新学習指導要領（2008）にも継承され、第1章 総則 第1 教育課程編成の一般方針には、生きる力を育むことを目指し、思考力・判断力・表現力等の育成に努めるとある。さらに思考力・判断力・表現力等を育成する観点から言語活動の充実を図ることが求められている。言語活動を充実させ、思考力・判断力・表現力を育成することによって「生きる力」を育みたいと考え、本研究に取り組んだ。

研究の内容

1 研究の背景

OECD（経済協力開発機構）生徒の学習到達度調査2009年度調査の結果、「必要な情報を見つけ出し取り出すこと（「情報のアクセス・取り出し」）は得意だが、それらの関係性を理解して解釈したり、自らの知識や経験と結び付けたりすること（「統合・解釈」「熟考・評価」）は苦手である。」との見解が示された。

また、国立教育政策研究所平成22年度全国学力・学習状況調査【小学校】報告書によると、資料や情報に基づいて自分の考えや感想を明確に記述すること、日

常的な事象について、筋道を立てて考え、数学的に表現することなど、思考力・判断力・表現力といった「活用」に関する記述式問題を中心に課題が見られた。特に、文と文のつながりを理解したり、登場する人物や必要な情報を関係付けたりすることに課題がある。

これら学力に関する調査の結果より、内容を理解することはできているが、文章や人、情報などを関係付けて考え自分の考えを文章表現することができなくなっていることがわかる。

また、これまでの自分の言語活動の授業実践を振り返ってみても、児童の自主性に頼るがあまり、思考力・判断力・表現力を育むための「書く」言語活動に対する計画的な支援を十分にできていないことがあった。

2 研究テーマの設定

これらのことから、研究テーマを「小学校国語科における関係付けて考える力の育成」に設定した。

(1)関係付けて考えるとは

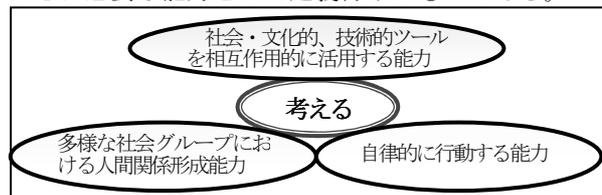
ア 考える力

辰野（1995）は思考力について、「考える」ということは、観察や記憶によって頭の中に蓄えられた内容をいろいろに関係付け、新しい関係を作り出すことであると述べている。

このことから「関係付けて考える力」を、「考える力」として捉えた。

イ キー・コンピテンシー（主要能力）

関係付けて考える力を定義付けるにあたり、OECDの「キー・コンピテンシー」（第1図）を参考にした。「キー・コンピテンシー」とは複雑に変化し多様化する社会の中で、個人に関係する様々なカテゴリーを踏まえ、個人が深く考え行動することの必要性を示し、子どもたちに必要な能力として定義付けたものである。

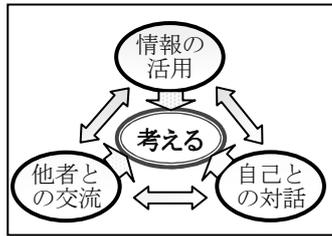


第1図 キー・コンピテンシー

1 伊勢原市立成瀬小学校
研究分野（授業改善推進研究 国語）

また、キー・コンピテンシーの育成の必要性を指摘する佐藤（2003）は「学び」を「モノとの対話」「他者との対話」「自分自身との対話」という概念が三位一体となって遂行される「意味と関係の編み直し」の過程として定義している。

これら先行研究から「関係付けて考える力」とは「情報の活用」「他者との交流」「自己との対話」の3つの能力の総体と定義し研究を進めた（第2図）。



第2図 関係付けて考える

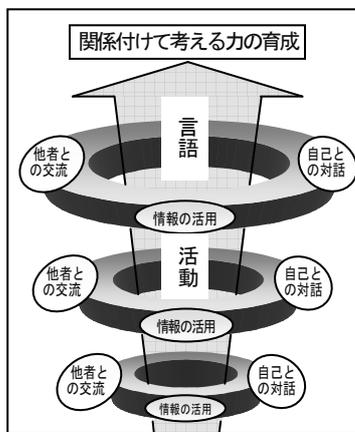
(2)書く活動

また本研究では、書く活動を通して関係付けて考える力を育成する。考えを書くことにより、思考は関係付けられ整理され、思考が明確になり新しい発見や疑問も生まれる（第3図）。この過程の繰り返しを「意味と関係の編み直し」と捉え、サブテーマを「書く活動を通して」と設定した。



第3図 意味と関係の編み直し

これらのことから「情報を活用して考える」「他者と交流して考える」「自己と対話して考える」3つの「関係付け」の過程を踏まえた「書く」言語活動を行い何度も繰り返しながら「関係付けて考える力」を育成しようと考えた（第4図）。



第4図 関係付けて考える力の育成

3 研究の視点

以上のような考えから研究テーマに迫るため、次のように研究の視点を設定した。

- (1)関係付けて考える力の明確化
関係付けて考える力の系統表の作成と活用
- (2)指導過程の工夫
書く言語活動の充実を図る授業づくり
- (3)指導方法の工夫
「情報の活用」「他者との交流」「自己との対話」の3つの能力を育てる場の設定と具体的な学習活動

(1)関係付けて考える力の明確化

国語科の指導内容は、系統的・段階的につながっていくとともに、反復的に繰り返しながら学習し、能力の定着を図っている。そこで、低中高学年段階で、どのような関係付けて考える力を付けるべきか整理した。

まず、OECDの「キー・コンピテンシー」のカテゴリーを参考に「情報の活用」「他者との交流」「自己との対話」をさらに細分化し付けたい能力を設定した。次に、松本（2009）が言語的思考に関わる力をまとめた「書くための思考技能系統表」を参考に、低中高学年の順に思考を系統化した。さらに、学習指導要領の「内容」をあてはめ、指導内容が具体的にわかるように、「関係付けて考える力の系統表」（第1表）を作成した。あくまでもこれは理論的仮説であり、一般的な根拠をもつものではないが、本研究では、この系統表をもとにねらいを明確にして授業実践を行い、「関係付けて考える力」を育成しようと考えた。

第1表 関係付けて考える力の系統表

	情報の活用	他者との交流	自己との対話
	課題に応じて必要な文章や資料等を取り上げ、基礎的・基本的な知識・技能を活用する。	相互に思考を深めたりまとめたりしながら解決していく。	目的や条件を明確にして、自分の経験や心情と関連付けて考えを発信する。
付けた能力	内容を理解する 論理的に考える	相手の立場で考える 高め合う 協力して まとめる 解決するため	自分の周りの状況を把握する 見通しを立てる 表明する
	①を活用する ②を活用する ③を活用する ④を活用する ⑤を活用する	共有する	主観的に述べる
低学年	順序立てる・つなぐ 想像を広げる 順序よく述べる	相手の考えに興味をもって反応する（尋ねる応答する） 相手の行動から、気持ちを考える	経験したこと・想像したこと、を報告したり感想を述べたりする 必要に応じて述べる 身近なことから考える 自分を課せられた結果、期待を意識する
中学年	分類する・類推する 中点を捉える	吟味し、比較する 異なる考えを認める（質問や感想） 人の性格や気持ちの変化、情景から相手のことを考える	目的をもって説明する 関心をもちて調べたことを説明する 目的をもって述べる 学校・家庭・地域の中から考える 自分の役割・進路・きまりを意識する
高学年	構造化する 内容や要旨を捉える	評価し、総合する インターネットを活用する 意図をもって調べ、整理する 図表・数値を用いる 表現の効果を確かめる 文章全体の構成を考える 事実と感想、意見を区別する	価値付けて述べる 自分の内的要因（責任・理想・個性・立場・経験）と対話し、意見を述べる 計画を立てて述べる 学習したことの中から考える 自分が関わる規則・文化を意識する

(2)指導過程の工夫

大村（1978）は書くときの学習者のつまづきを、「書くことがわからない」「書き方がわからない」の二つに集約している。「書くことがわからない」とは、自分の考えができていないとも捉えられる。また、大西（1995）は、これまで意見文や感想文の指導では、構

成の指導に重点が置かれる傾向にあったが、意見文、感想文の指導において、もっとも力を入れなければならないのは、意見・感想を創り構成する方法と技術を習得させること（創構の指導）としている。

そこで、文章を書く前に自分の意見を創り意見を構成する場を設定し、指導過程を「意見を創る過程」と「文章化する過程」に分けて授業づくりに取り組んだ。

(3) 指導方法の工夫

授業の前に、6年生児童に「少年から少年へ臓器移植」という新聞記事を読んで意見文を書かせた。その結果、感想は書いてあってもそれに基づいた意見は書いていない児童が43%であった。感想主体の文章は書いてある内容を受けて感じたことを書いてあるが自分の事として捉えておらず、自分の経験を振り返ったり自分のこれからの行動に生かしたりするような文章ではない。これは、関係付けて考える力の「自分の内的要因（責任・理想など）と対話し、意見を述べる」ことができていないということである。

そこで、「自分の内的要因と対話し、意見を述べる」ことに重点を置き、「情報の活用」「他者との交流」「自己との対話」の三つの能力を三位一体として学習できるように次のように指導方法を工夫した。

ア 情報の活用を行う能力を育てる指導方法の工夫

「意見を創る過程」で、事実と感想・意見に整理し考えの構成図を作らせる。それをもとに「文章化する過程」で文章全体の構成ができるようにする。

イ 他者との交流を行う能力を育てる指導方法の工夫

人の相互関係、心情、場面から相手の立場に立って考えさせ、自分と関係付けて考えさせるために、自分の人間関係図を作らせる。

ウ 自己との対話を行う能力を育てる指導方法の工夫

自分の内的要因（経験や理想など）と結び付けて考えさせるために、マインドマップを作らせる。

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間 平成23年9月26日～10月6日

対象児童 第6学年 3学級（84名）

授業時数 6時間（各学級）

単元 「わたしの意見」を書こう

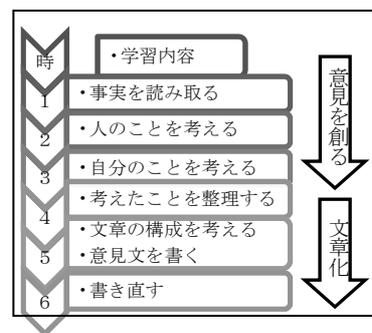
付けたい力 本単元では関係付けて考える力の系統表から、次の関係付けて考える力を育成する（第2表）。特に○の項目に重点を置いて指導し、成果を検証する。

第2表 本単元で付けたい「関係付けて考える力」

	情報の活用			他者との交流		自己との対話	
	内容や要旨を捉える	事実と感想、意見を区別する	文章全体の構成を考える	表現の効果を確かめる	相手の立場から考える	人の相互関係、心情、場面から深まりを求める	共同での考えの深まりを求める
高学年			○		○		○

(2) 指導計画

指導計画は全6時間で、右の通りである（第5図）。自分の意見を創る過程と、自分の意見を文章化する過程に分けて計画し授業を実践した。



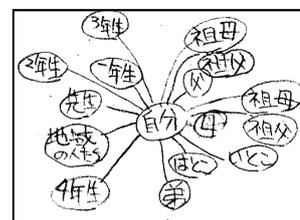
(3) 授業の展開 第5図 指導計画（全6時間）

【第1時】「事実を読み取る」

東日本大震災で被災した当時小学校6年生の作文「あの日学んだこと」（毎日小学生新聞2011.9.11）を読んで考えたことを書かせた。意見文の書き方を説明し、「大切なもの」をテーマに設定させた。

【第2時】「人のことを考える」

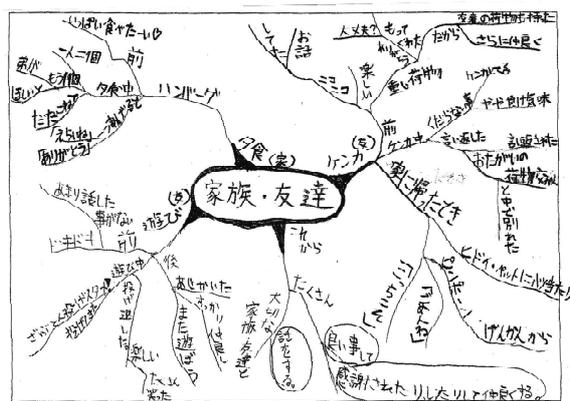
筆者や自分の人間関係図（第6図）を作り、「もしも自分だったら」と考えさせた。筆者が経験を通して学んだ「大切なもの」を自分に結び付けて考えさせるために、まず自分の人間関係を把握させた。



第6図 人間関係図

【第3時】「自分のことを考える」

マインドマップを作り、「大切なもの」に関わる自分の経験を書かせ（第7図）今まで自分でも意識していなかったり、考えたりすることもなかった自分にとって多くの「大切なもの」に気付かせた。児童はマインドマップを作る過程で自分の気持ちや行動、人との関わりを考えることができた（マインドマップを作った感想）。



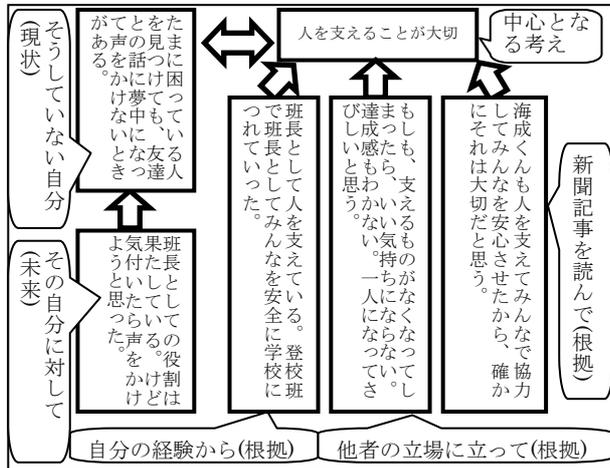
第7図 マインドマップ

・マインドマップが大きいほど思い出や自分の気持ちがいっぱいだと思います。
 ・人との関わりは強いなと思いました。
 ・中心となっているものと関わりがたくさんあると思った。

マインドマップを作った感想

【第4時】「考えたことを整理する」

ワークシートでこれまで考えたことを整理し意見を構成させた（第8図）。まず、自分の中心となる考えの根拠を示させ、さらに自分の意見を深めるため、自分の現状、未来を考えさせた。理想論を述べるのではなく、客観的に自分を見つめ、論理的に考えて、「だからこうする。」と主体的に実現可能なことを考えさせ、自分の意見の論理性を高めさせた。



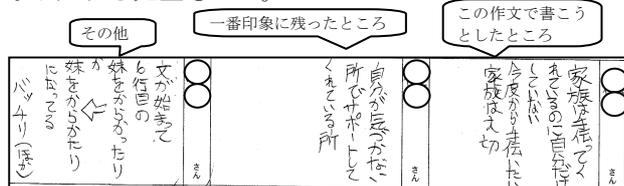
第8図 児童Aの考えの構成図

【第5時】「文章の構成を考える」「意見文を書く」

まず、意見文の構成の基本例を説明した。第4時で論理的に構成した自分の意見を選び、並べ替え、つないで文章を構成させた。児童は今までのワークシートを見ながら、部分部分の記述をイメージして、全体の構成を考えていた。その後、意見文を書かせた。

【第6時】「書き直す」

お互いに作文を読んで読み取ったことを、書いて伝え合う活動（4人グループ）をさせた（第9図）。読み取ったことを伝えてもらい、自分の文章が伝わったかどうか確認して文章を直させた。また、人が書いた意見文を読んで、その考えに共感し、自分の意見文に取り入れる児童もいた。



第9図 ワークシート（一部抜粋）

(4) 検証授業の結果と考察

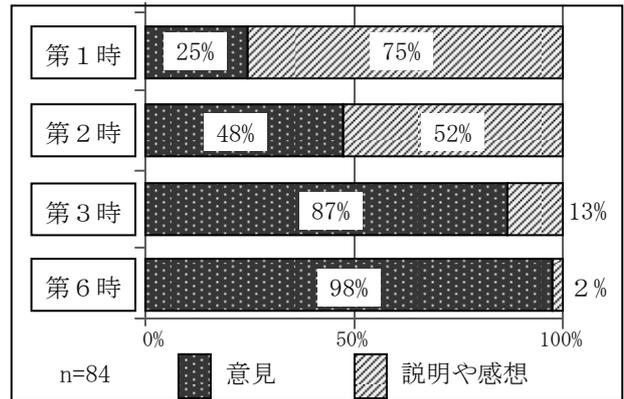
ア 指導方法の工夫における児童の変容

ワークシート（1時～3時）や授業の最終に書いた意見文（6時）の記述を比較し、変容を見た。

(7) 人間関係図を作ったことによる、意見を書いた児童の割合の変化

第1時から第2時の変化を見ると意見を述べるようになった児童が23ポイント増加した（第10図）。第2時に人間関係を考え相手の立場に立って考えたことで、

読んだだけでは他人事として捉えていた児童が、自分の事として捉え主体的な意見になったと考えられる。



第10図 意見を書いた児童の割合の変化

(4) 人間関係図を作ったことによる、記述の内容の変化

抽出児童Bのワークシートの記述（考えたこと）の第1時と第2時を比較し、その質的な変化を見た。

（第1時）東北の人達にはすごくたいへんなことだった。海成さんの文章を読み、海成さんの家族は織笠に住む祖父母を失っていたのです。こっちは死んでしまった人はいないからそうでもないんだと思っていたんだけど、海成さんは自分がわからない大切なことを学んだなんて、いい経験し生かしてほしいと思った。

（第2時）もし、自分が海成くんだったら、自分の身の回りの人がいなくなり一人きりになったときと同じくらいの悲しみをあじわったと思いました。でも、笑って生きて何がわるい。笑って笑顔を見せその笑顔で人は支え合い心をおることなく支え合える。家族を失った人だっている。母や父、祖母、祖父それだけじゃない。くやしい時、悲しい時はみんな同じ涙を流す。でも、それを乗り越えてこそ、また昔と同じ笑顔を見せる。ぼくは、人の笑顔が人を強くたくましくさせると思った。

B児は第1時では、「東北の人達にはすごくたいへんなことだった」と述べつつも、「いい経験をしたから生かしてほしい」とも述べており、まだ、本当に相手の立場に立って考えていたとは思えない。第2時の授業では、悲しい場面で、自分の笑顔が周りの人の心情を変えた体験をもとに、大震災の悲しみの中で、筆者が笑って生きることを肯定的に評価し、「笑って生きて何がわるい」と述べている。これは、自分の人間関係図を描くという活動を通して、自分の体験を思い浮かべ、筆者の人間関係や心情、場面の様子を推測し、筆者の立場に立って筆者の行動や考えを理解したことで、他人事としての記述から「自分の意見」としての記述へと内容が変化したものである。

これらのことより、相手の立場に立って考えさせる

ために自分の人間関係図を作らせた指導方法は、関係付けて考える力の育成に有効であると考えられる。

(ウ) マインドマップを作ったことによる、意見を書いた児童の割合の変化

第2時から第3時の変化を見ると、意見を述べるようになった児童が39ポイント増加した(第10図)。これは第3時にマインドマップを作り、自己との対話をさせ、経験や知識を結び付けて考えさせたことで、他人事として捉えていた児童が、自分の事として捉え主体的な意見になったと考えられる。

(エ) マインドマップを作ったことによる、記述の内容の質的な変化

抽出児童Cのワークシートのメモ(考えたこと)の第2時と第3時を比較し、その質的な変化を見た。

(第2時) 私には、家族や友達がいなくなってしまうなんて想像できない。引っこしとかで、自分の近くからいなくなってしまうのは分かるけど、海成君のように津波で家族(親せき等)や友達を亡くしてしまうのは悲しいし、さびしいことだと思う。支え合って協力することができにくくなると思う。

確かに、大地震や大津波が来たら絶対イヤだけど、そういうことを経験して、人は大切なことを得るんじゃないのかな?

(第3時) 「ケンカ」や「夕食」は前のこと。「遊び」は昨日できたばかり。男の子だけど、友達になって、仲良くなってうれしかった。そういう気持ちが家族や友達を大切にできるのかな?

たくさん遊んで、たくさん話して、家族や友達は最高の存在。これからも、みんな仲良くやっていきたいです。

第2時では、地震や津波の経験をすれば「大切なもの」が得られると述べている。逆に考えれば、自分は経験していないからよくわからないともとれる。しかし、マインドマップで自分の経験を思い出してみると、仲良くなってうれしかった経験が、また仲良くしようという気持ちにつながるのではと気付くことができました。「大切なもの」と考える根拠を自分の経験を通して挙げ、「大切なもの」を価値付けることで、こうしていきたいという主体的な自分の意見になったと考える。

これらのことより、内的要因と対話し、意見を述べさせるため、マインドマップを作らせた指導方法は、関係付けて考える力の育成に有効であると考えられる。

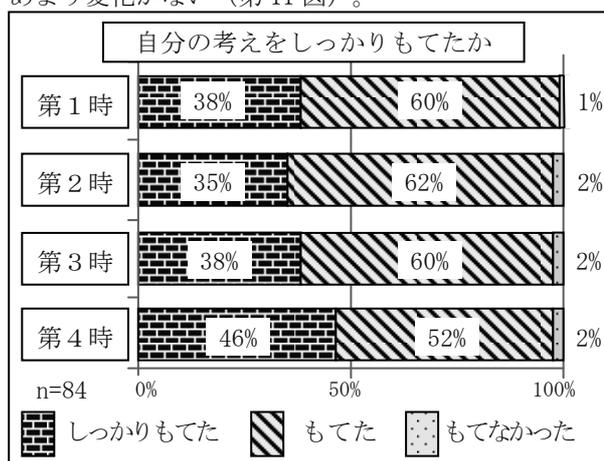
イ 指導方法と指導過程の工夫における児童の変容

自分の考えを明確にするために、指導過程を「意見を創る過程」と「文章化する過程」に分け、考えの構成図を作成して創った意見を文章化させたので、指導過程を工夫したことと考えの構成図を作成した指導方法は同じ観点で見ることとした。

(フ) 考えの構成図を作成したことによる、意識の変化

第3時から第6時の記述の内容の変化を見ると、意見を述べるようになった児童が11ポイント増加し、最終的に98%の児童が意見を述べるようになった(第10図)。これは、第4時にワークシートを活用し、考えの構成図(第8図)を作成してから、第5時に文章全体の構成を考え作文を書いたからではないかと考える。

児童の自己評価によると、第1時から第3時までは「自分の考えをしっかりとてた」とする児童の割合はあまり変化がない(第11図)。

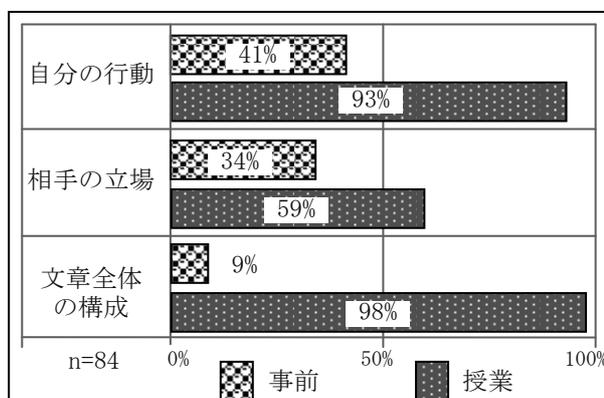


第11図 自己評価の変化 第1時から第4時

変化があったのは第4時で「自分の考えをしっかりとてた」と意識した児童が増加した。第3時までは児童は様々なことを考えて自分の意見を記述している。しかし、頭の中はまだ混沌としている状態であったと考えられる。第4時でワークシートを活用し考えの構成図(第8図)を作成したことで、自分の考えが整理され深まり、「自分の考えがしっかりとてた」と意識できたのであろう。また、第4時まで「自分の考えがもてなかった」と意識した児童が2%いた。しかし、本単元では、その児童に対して有効な手立てを十分に行うことができなかったため今後の課題としたい。

(イ) 意見文の記述内容の変化

事前に書いた意見文と授業の最終に書いた意見文を比較し、その変化を見た(第12図)。



第12図 意見文の記述の変化 事前と授業

自分のこれからの行動について書いている児童が52ポイント増えている。これは、明確に自分の意志をもってこれからこうするべきという主体的な文章であるといえる。また、相手の立場に立って考えて書いた児童が25ポイント増加している。自分の主観的な考えではなく、相手のことを考えたり、自分の周りの人たちのことを考えたりして多角的に考えた、より客観的な文章であったといえる。さらに、ほとんどの児童が構成された文章を書いた。これは「意見を創る過程」で主体的・客観的な考えを明確にもち、考えの構成図を作成したことによって中心となる考えとその根拠が構成されていたからこそ、「文章化する過程」で筋道を通った文章が書けたといえるのではないだろうか。

これらのことより、指導過程を工夫し「意見を創る過程」と「文章化する過程」に分け、考えの構成図によって創った意見を文章化する指導方法の工夫は、関係付けて考える力の育成に有効であると考えられる。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

事前調査を踏まえ、「関係付けて考える力」の育成を目指して、キー・コンピテンシーを参考に関係付けて考える力の系統表を作成し、書く活動を通して検証授業を行った。明らかになったことは次の二点である。

一つ目は、人の相互関係、心情、場面から相手の立場に立って考えたり、自分の内的要因と対話したりすることによって、より客観的・主体的な考えを文として表現できることが明らかになった。思いつきの主観的な考えではなく、物事を自分の事として捉えた意見が創られ、中心となる「書くこと」ができ、客観的・主体的な文になったと考える。

二つ目は、「情報を活用して考える」「他者との交流によって考える」「自己との対話によって考える」という3つの関係付けをすることによって、より論理的な考えを文章化して表現できることが明らかになった。自分が考えたことを、中心となる意見とその理由、事例に分類し、事実と感想、意見を区別して文章全体の構成を考え、文を組み立て構造化したことによって、「書き方」がわかり、論理的な文章になったと考える。

(2) 今後の課題

今回の研究では、関係付ける力の系統表を作成し、ねらいを明確にして指導を行った。授業づくりや検証するにあたって効果のあるものであったが、系統表自体は一般性のあるものではない。今後の実践を通して改善し信頼性を高めていきたい。

また、「書く活動」によって「関係付ける力」を育成しようと考えたが、国語科は基礎的な国語の能力を身に付けるために、現行の「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の領域構成は維持しながら言語活動を通して、思考力・判断力・表現力等を育む

とされている。そこで、「話すこと・聞くこと」「書くこと」及び「読むこと」の各領域の特性を生かし、「関係付けて考える力」を各領域で発達段階に応じて系統的に育成する方法を検討する必要があると考えた。

おわりに

国語科は、言語活動の充実の中核となる教科であり、より一層、言語の教育としての立場を重視し、国語力の向上について、授業を改善することが求められている。他教科との関連を図りつつ、系統的な指導で関係付けて考える力を確実に付けなくてはならない。

また、国語科のみならず全ての教科で、関係付けて考えさせることが重要であると考え。そうすることで、人との関わりを大切にしつつ社会とのつながりを実感させ、児童の「生きる力」につなげていきたい。

引用文献

文部科学省 2005 「OECDにおける「キー・コンピテンシー」について」 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryu/06092005/02/001.htm (2011. 5. 10取得))

参考文献

国立教育政策研究所 2010 「生徒の学習到達度調査 (PISA)」 (<http://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/index.html> (2011. 4. 15取得))

国立教育政策研究所 2010 「平成22年度 全国学力・学習状況調査【小学校】報告書」 (<http://www.nier.go.jp/10chousakekkahoukoku/02shou.htm> (2011. 4. 15取得))

辰野千壽 1995 『考える力の伸ばし方・改訂版』 図書文化社

ドミニク・S・ライチェン、ローラ・H・サルガニク (立田慶裕 監訳) 2007 『キー・コンピテンシー国際標準の学力をめざして』 明石書店

佐藤学 2003 『教師たちの挑戦』 小学館

松本修 2009 「書くための思考力と技能」 (<http://www.juen.ac.jp/lab/osamu/kiyou.pdf> (2011. 5. 27取得))

大西道雄 1995 『創構 (インベンション) 力の育成を核とした意見文の指導』 教育科学/国語教育 8月号 明治図書

大村はま 1978 『やさしい国語教室』 共文社

読売新聞 子どものニュースウィークリー YOMIURI ON LINE 「国内初 家族が提供承諾」 (<http://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/children/weekly/20110423-0YT8T00420.htm> (2011. 6. 24取得))

毎日小学生新聞 「あの日学んだこと」 (2011. 9. 11)